論文

言葉の獲得初期における乳児の歌唱過程について

扶　瀬　絵梨奈

1．はじめに

広辞苑（第七版）によれば、「歌」とは①声に節（ふし）を付けて歌う詞。②音律に合わせて数を整えた詞。③和歌。短歌。やまとうた。④はやりうた・長唄・小唄・地唄・端歌などの総称。と示されている。つまり、歌は人間だけがもつ能力のひとつである「言葉」を用いて、音の高低・長短・強弱などの変化によって表現されると言い換えることができるであろう。

はじめて耳にする歌でもそれらを記憶し、繰り返し歌ううちにやがて歌詞を伴って歌唱することができるようになるのは、私たち成人がメロディの中から単語のまとまりを聞き出すことのできる能力を身に付け、その意味を記憶や経験から想像することのできる一般常識を持ち合わせているからである。例えば、歌詞の一部に「キョウカイニイクヨ」という文が出現した場合、耳にするのは切れ目のない音声の連続であっても、詞の流れや言葉のアクセントによって「キョウカイニ / イクヨ」か「キョウ / カイニ / イクヨ」のどちらであるかを聞き分け、意味を理解することは容易い。しかし、これらの知識をもたない言葉の獲得初期における乳児は、曲の中でどのような過程を経て歌詞を覚え、歌唱表現を身に付けていくのだろうか。

近年の研究では、選好注視法やサッキング法などの方法により、胎生５か月頃に聴覚が完成してから産声を上げるまでに聞いた母親の声と、外部から伝播された音楽について記憶していることが明らかとなっている。出生後、子どもはより親密に感じる音や音楽と出会っていくことになるが、特に、自分自身に歌いかけられる歌への選好はいっそう増し、歌いかける女性の声を好むなど、そこで歌われる歌のスタイルについても好みをもっているようだ。McDermott & Hauser（2006）による先行研究では、類人猿は「音楽より静寂さを好む」ことが明らかにされている一方で、ヒトの赤ちゃんは「静けさ」より親が歌う「あそび歌や子守歌」を好んで聴取するという報告もある。

Oller（1980）の喃語発達に関する調査によれば、健聴児では１歳を迎えるまでの間に５つの段階を経て始語が出現するという。偶然表出されたような /a/ や /u/ など母音に聞こえるシンプルな発声が生じる発声期（0 ～ 1 ヵ月）、クーイング期ともよばれ口蓋音も混じる Goo 期（2 ～ 3 ヵ月）、「喃語」（babbling）と一般に理解される発声（/ba ba ba / /man man man/ など子音が多用され反復を多く含む）となる拡張期（4 ～ 6 ヵ月）、反復が徐々に減り、短く明瞭な発声（/aba/ /da-da-/ / aja/ /nma/ など）となる標準喃語期（7 ～ 10 ヵ月）、「初語」と理解され、示すものと音声が対応する有意味語の発声（/manma/ /mama/ /atta/ など）となる非重複性喃語期（11 ～ 12 ヵ月）である。このように、言葉の発達については様々な研究が進められ発達段階やその獲得プロセスが明らかとなっているが、「人はいつからうたい始めるのか」、「人はどのように歌唱を獲得していくのか」ということについてはほとんど検証されていない。

保育所保育指針（2017）では、乳児保育に関する社会的発達に関する視点として、「保育士等による語りかけや歌いかけ、発声や喃語等への応答を通して、言葉の理解や発語の意欲が育つ」こと、

1歳児以上3歳未満児の領域「表現」では「歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする」ことが内容として記されている。乳児の生活の中に「うた」が必要とされる中で、彼らが「ことば」から「うた」へ、あるいは「うた」から「ことば」へと発展させていく過程を明らかにすることは研究の新規性があり、また同時に、保育者あるいは養育者が「うた」を通して受容的・応答的なかかわりをもつことの意義を提示できると考える。

2．初語出現までの言葉の学習

子どもが言葉を獲得していく過程や発達段階に関しては、既に多くの言語学者や心理学者によって明らかにされている。今井（2022）によれば、人が最初に学習するのは「リズム」と「イントネーション」の特徴だという。これは母親の胎内で羊水の中に在胎する頃から学習していることで、言葉を明確に聴取することは難しくとも、受精5ヶ月頃から働きはじめる聴覚機能により、音の高低とリズムは水中でも認識することができる。また出生後、新生児は自分の母親などからの独特の調子やリズムの話しかけに対し自分の身体を同調させて動かすこと、また大人も子どもの動きなどに応答する相互同期性が見られることは、アメリカの認知心理学者であるCondon & Sanderの研究によりよく知られており、エントレインメントEntrainmentやシンクロニーSynchronyとも呼ばれている。人が発声する際の強弱、緩急のリズム（あるところははっきり発音し、あるところはまとめて素早く言うなど）、そしてイントネーションは、多くの場合文章の区切りと呼応しており、今井は「赤ちゃんがお母さんのおなかの中で学んでいる言語（母語）のリズムとイントネーションのパターンは、生まれた後に人の声を単語に区切っていくための、非常に大事な最初の手がかり」と示している。このように、子どもは初語が出現する前から音声知覚能力を発達させているが、言葉の発達には環境からの働きかけが欠かせず、発達には音声を聞くこと（音声知覚）、音声を発すること（音声表出）、コミュニケーション（対人関係）、物の認知（対物関係）の4つの発達基盤が必要である。

また、今井・針生（2022）の研究により、0歳後半から1歳過ぎにかけて、子どもは様々な手がかりを使って発話の中から決まった「音素のまとまり」を切り出し、それが何らかの意味を担っていることを理解し、指示対象と結びつけようとするようになっていくことが明らかとなっている。例えば、物理的には切れ目のないような話し方の中でも、ミルクという単語は [mi] という音節の後に100%の確率で [ru]、その後には [ku] が続くという音素の遷移確率や、単語の強勢がどこにきやすいかということを学んでいく。強勢による切り出し方について、Jusczykら（1999）が英語を母語とした乳児を対象とした調査では、強勢パターンが「強－弱」となっている単語を用意に聴き取ることができることが明らかとなっており、例えば‘guitar’のように強い音節で始まらない単語を文章の中から切り出す場合は失敗が頻発して認められ、‘taris’という音素のかたまりを聴き取ってしまう結果となった。

周りの大人からの働きかけという面に着目すると、一般的に、乳児に接する大人は自身の行為を誇張することが知られており、その特徴ある行為は、Infant-Directed Speech / Motion（以下IDS / IDM）とも呼ばれる。歌唱（歌いかけ）は、IDS / IDMと比べピッチは同程度もしくはより高く、発話速度が遅いという特徴をもつ。またNakata and Trehub（2004）は、母親のIDSに比べ歌唱（歌いかけ）に対して持続した選好を示すことを明らかにしている。

3．研究の目的

本研究の目的は、乳児が言葉を獲得し始める時期に、大人の歌いかけに対して反応を示したり模倣したりする中で、彼らがどのように歌を記憶し、歌い始めていくのかを明らかにすることである。また、前述した言葉の学習過程と、子どもが「うた」を歌い始める過程にはどのような関連があるのかという点についても調査する。言葉の獲得初期（本調査では、1歳9か月までを対象とする。）において、子どもが歌唱の経験を重ねていく様子と、のちに音楽表現へと発展させていく過程を明らかにしたい。

4．研究方法

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、長期にわたって複数の乳児と接触する機会を設けることが困難のため対象は母子1組(子は男児)とし、生後4か月～1歳9か月までの様子を全3期に分け、調査する。研究方法はビデオカメラによる撮影とICレコーダー録音による観察を主とし、身体への侵襲性は無いが、対象が乳児であることから精神的・肉体的な負担が生じないよう1日の撮影時間は1時間を限度とする。撮影・録音の他に、母親が担当保育士から受けた報告、連絡ノートでの記録も考察に使用する。これらの調査にあたっては、個人が特定されないよう十分配慮する。調査結果は、研究の目的以外に使用しない。また、研究終了後には音声および録画データを破棄し、情報の流出を防止する。調査方法および内容については、名古屋柳城短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

5．研究内容

生後4か月21日より認証保育所へ入所している男児について、生後4か月～1歳9か月までの1年5ヶ月間にわたり調査する。保育所では、月ごとに「今月のうた」として2曲、「今月の手遊び」として2曲、「今月の体操」として2曲、毎日音楽に触れる機会がある。また、午睡時間以外の保育中は小さな音で常に音楽が流れている。本調査では、歌い始める過程を全3期（第1期＝前言語期、第2期＝初語出現以降、第3期＝2語文出現以降）に分けて記録する。

【第1期（前言語期)】

月齢	記録
4か月2日	喃語を発声する時間が徐々に長くなり、自分の中から様々に出る声色や音を楽しむ様子がみられる。
4か月18日	「大きな栗の木の下で」の歌（録音）に合わせ、喃語を反復したり、手足の動きを活発にしたりするようになる。
7か月	声量が増し、強弱や高低の幅を広げて喃語を話す。
9か月	「ちょうだい」、「バイバイ」、「おいで」の意味を理解する。
9か月	大人の動きの真似をよくするようになり、歌いかける大人の口元や手遊び時の手の動きをじっと観察したり、模倣したりする。

第1期は、まだ言葉を伴って歌うことはできないが、喃語の発声を楽しんだり音楽の鳴る方へ首

を傾けようとする様子や、歌いかける大人の口元や手元をよく観察する姿が盛んにみられた時期である。特に4か月18日頃にかけては、歌詞を伴った音楽（調査時は「大きな栗の木の下で」）が流れると喃語の発声が盛んになり、音楽が止まると発声を止める、といった共に歌うような姿がみられた。初語が出現する直前には、歌いかける大人の口元や手あそび時の手元を注視し、簡単な身体模倣をする様子がみられるようになった。

【第2期（初語出現以降）】

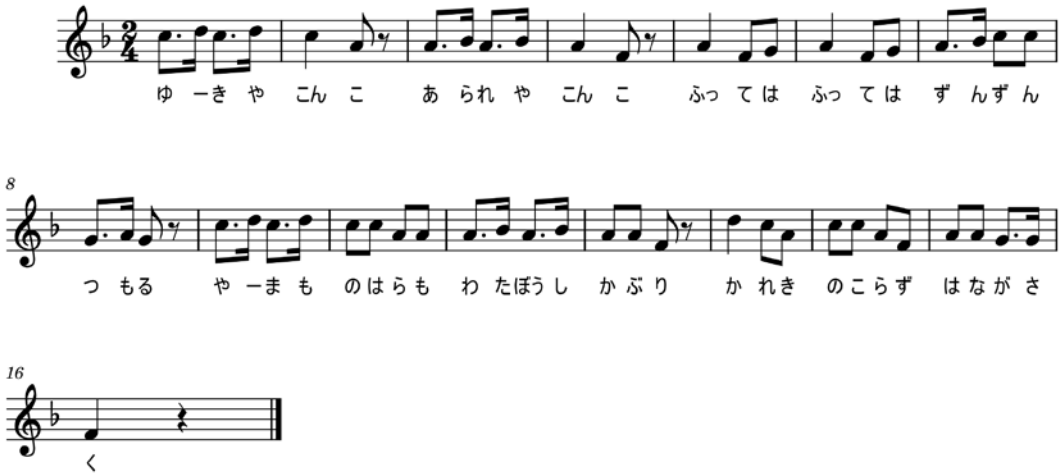
この時期に現れた言葉（出現順）：あっち（初語）、ここ、こっち、ぱっぱ（葉っぱ）、パパ、ママ、まんま（ご飯）、わんわん（動物全般）、ちっち（チーズ）、ちゃちゃ（お茶）、ちゃんちゃん（座ること）、ちゅんちゅん（鳥全般）、ねんね（寝ること）、じゃん（ジャンプ）、あか（赤色）、ナナナ（バナナ）、ペン、いち（苺）、ちりん（キリン）

月齢	記録
1歳0か月	「あっち」と手を出し、自分の行きたい方向を伝えるようになる。（初語の出現）
1歳2か月10日	母親が「ゆき」を歌うと、「こんこ」の部分を一緒に歌う。（譜例1、歌詞1）また、まだ歌うことのできない部分も身体を前後や左右に揺らしながら音楽を楽しむ様子がみられる。
1歳2か月24日	（担当保育士より）自分の名前や、保育園のお友だちの名前をなんとなく言えるようになってきた。朝のごあいさつで自分の名前を呼ばれると、タンブリンを叩きながらリズムに合わせて「は・あ・あ」とお返事をする。
1歳4か月12日	母親が「チューリップ」を歌うと、四分音符にあたる箇所を模倣して歌うようになる。（譜例2、歌詞2）

第2期は初語が出現し、歌詞の一部を歌唱するようになった時期である。移動手段が四つ這いから二足歩行となり、身体の発達とともに発声に必要な口まわりの筋肉や声帯も発達し、声量が一段と増した時期でもある。

対象児が初めて歌の一部を歌唱したのは1歳2か月時で、保育所内で今月のうたとして毎日聴いていた「ゆき」を母親が歌唱すると、繰り返しの言葉「こんこ」の箇所で声を揃え歌い始めた。また、その他の部分では身体を弾ませたり左右に揺らしたりしながら、音楽を楽しむ姿がみられた。何度歌っても、「こんこ」の場所は記憶している様子で、リズムよく歌唱する様子があった。その後、1歳2か月24日には、保育所の朝の会で自分の名前を呼ばれると、タンブリンを叩きながらリズムに合わせて「は･あ･あ」とお返事をするようになるなど、簡単なリズムあそびができるようになったと担当保育士から報告があった。やがて1歳4か月12日には、母親が「チューリップ」を歌うと、四分音符にあたる箇所を模倣して歌うなど、言葉やリズムが繰り返される箇所以外で歌詞の一部を歌うようになった。

譜例１.「ゆき」（作詞者：武笠三、作曲者不詳）



歌詞１.

（□は対象児が１歳２か月時に歌唱した箇所）

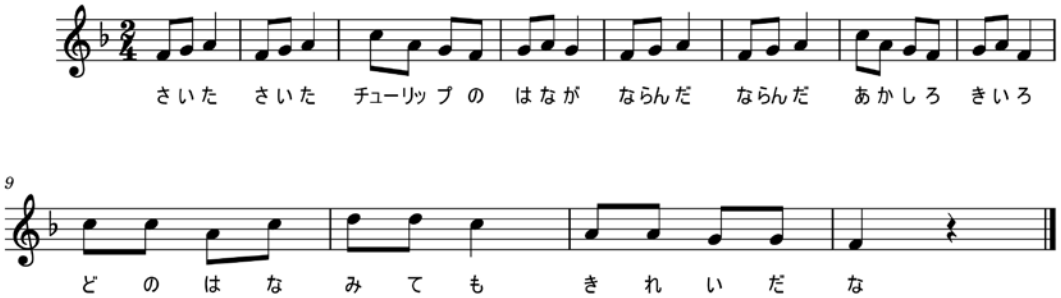
ゆきやこんこ　あられやこんこ

ふってはふっては　ずんずんつもる

やまも　のはらも　わたぼうしかぶり

かれきのこらず　はながさく

譜例２.「チューリップ」（作詞者：近藤宮子、作曲者：井上武士）



歌詞２.

（□は対象児が１歳４か月時に歌唱した箇所）

さいた　さいた　チューリップの　はな（が）あ

ならん（だ）あ　　ならん（だ）あ　　あか　しろ　きい（ろ）お

どのはなみても　きれいだな

【第３期（2 語文出現以降)】

この時期に現れた言葉（出現順)：あっとう（納豆)、あちち（熱い)、あち（蟻)、○○ちゃんの、ちうい（キウイ)、あかん（ミカン)、apple、1 ～ 10 までの数字、A ～ Z までのアルファベット、おいちい（美味しい)、Don’t touch、おーがーがー（Oh my God)、エビ、カニ、どうぞ、あーと（ありがとう)、いただきます、ごちそうさま、にゅうにゅう（牛乳)、以降多数

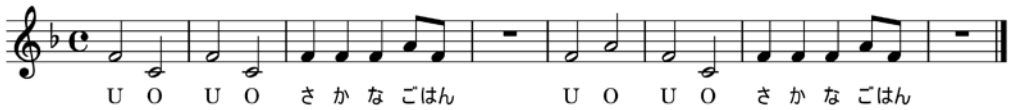
月齢	記録
1 歳 5 か月 2 日	初めて 2 語文を話す。「ぱっぱ（葉っぱ)、あった。」「わんわん、いた。」
1 歳 5 か月 18 日	不思議さに気付くと、「あれ？」と疑問をもつようになる。
1 歳 6 か月 8 日	知っている曲の歌詞を他の言葉に置き換えて、替え歌のようにして楽しむようになる。（譜例 3、歌詞 3）
1 歳 7 か月 21 日	「グーチョキパーでなにつくろう」の手あそびを好み、音楽に合わせて身体を左右に揺らしながら一部を歌唱する。（譜例 4、歌詞 4）
1 歳 9 か月 4 日	「グーチョキパーでなにつくろう」の手あそびを引き続き好み、歌唱する箇所に変化が現れるようになる。（譜例 4、歌詞 4）
1 歳 9 か月 22 日	保育所で「いっぴきの野ねずみ」を知り、3 日目に自分で手あそびをしながら一部を歌唱するようになる。（譜例 5、歌詞 5）
1 歳 9 か月 28 日	「いっぴきの野ねずみ」の手あそびを引き続き好み、6 日後より歌唱する箇所に変化が現れる。（譜例 5、歌詞 5）

第３期は調査の度に表現できる言葉数と音数が増え、対象児は言葉の爆発期を迎えたともいえる時期である。1 歳 5 か月で 2 語文を話すようになってから、より一層言葉の表現自体を楽しもうとする様子がみられた。また、自分の知っている既存の曲の歌詞を他の言葉に置き換えて歌ったり、歌の一部や手あそびを覚えて歌うことがきるようになるまでの日数が短くなったり、対象児が自発的に歌唱を楽しむ機会が多くなった。

第３期において、歌唱に最も変化がみられたのは 1 歳 7 か月～ 9 か月の間にかけてである。第 2 期までは、言葉とリズムが反復される箇所と、長音（1 音節で 2 モーラもつもの）の箇所から歌唱表現が始まったが、この時期にはそれ以外に単語や旋律の強勢が置かれる箇所も徐々に歌い始める様子を確認した。

譜例３.

「さかなごはん体操」（作詞・作曲：ケロポンズ）



歌詞３.

（原曲の歌詞）

U（ウー）O（オー）U（ウー）O（オー）さ！　か！　な！　ごはん！

U（ウー）O（オー）U（ウー）O（オー）さかな　ごはん！・・・

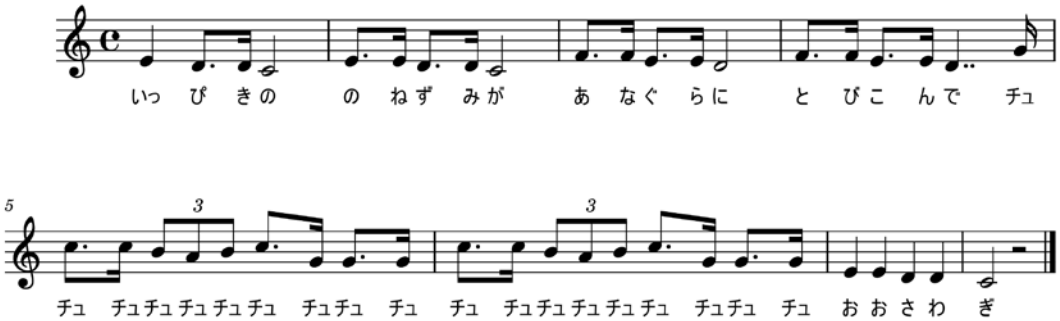
（対象児が１歳６か月８日時に歌唱したもの）

たー・たー・たー・たー　た　た　た　たたん

たー・たー・たー・たー　た　た　た　たたん

譜例４.

「グーチョキパーでなにつくろう」（フランス民謡）



歌詞４.

（原曲の歌詞）

グーチョキパーで　グーチョキパーで

なにつくろー　なにつくろー

みぎてがパーで　ひだりてがパーで

ちょうちょ　ちょうちょ

（対象児が歌唱したもの：１歳７ヶ月 21 日）

グー・パー・　グー・パー・

な・おー　な・おー

・・パー・　・・パー・

ちょうちょ　ちょうちょ

（対象児が歌唱したもの：１歳９ヶ月４日）

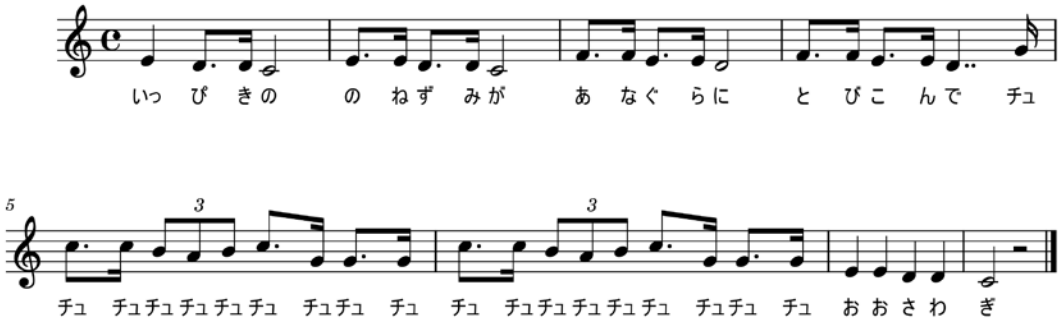
グーグーパーで　グーグーパーで

なぃつぅろー　なぃつぅろー

みいてがグーで　ひありてがグーで

あんぱんまん　あんぱんまん

譜例５．「いっぴきの野ねずみ」（イギリス民謡、作詞者：鈴木一郎）



歌詞５．

（□は対象児が１歳９か月 22 日に歌唱した箇所）

いっぴきの　のねずみが　あなぐらに　とびこんで

チュチュチュチュ　チュチュチュチュ　おおさわぎ

（1 歳 9 か月 28 日に歌唱した箇所）

いっぴきの　のねずみが　あなぐらに　とびこんで

チュチュチュチュ　チュチュチュチュ　おおさわぎ

６．考察

調査期間において対象児が歌唱した箇所は、次のようにまとめることができる。

1．言葉とリズムが反復される箇所と、長音（1 音節で 2 モーラもつもの）の箇所から歌唱表現が出現する。

2．繰り返し歌唱するうち、単語と旋律の強勢（強拍）箇所へと歌唱範囲が広がっていく。

生後間もない子どもでも、人が話す言語音と機械音との違いを認識し、人の言語音のほうにより長く注意を向けることはよく知られているが、このことを今回の調査に置き換えて考えると、子どもはピアノ等による伴奏の音と歌詞を聴き分けることができるということになる。対象児は、楽器による伴奏音を伴って聴いていたもの（「ゆき」、「チューリップ」、「さかなごはん体操」）に対しても、手あそび歌など伴奏音を伴っていなかった「いっぴきの野ねずみ」にも、同様の反応を示した。

また、前言語期には歌（録音）と同時に喃語を反復しながら音楽全体のリズムを楽しむ姿がみられたが、1 歳 0 か月に初語が出現してからは、歌の一部を言葉として楽しむ姿へと変化した。特に、言葉とリズムが反復される箇所（こんこ、チュチュチュチュ）は早い段階から音に合わせて歌唱できるようになり、続いて 1 音節で 2 モーラもつ長音の箇所をリズムに合わせて歌唱するようになった。第 3 期（2 語文出現以降）は、音のリズムを他の言葉で楽しんだり、長音の箇所に加え単語の強勢部分や旋律の強拍部分を中心として歌唱し始めるようになった。また、その範囲は第 3 期の中で徐々に広がり、不完全な単語はありながらも、やがて 1 フレーズ、そして歌全体を歌唱できるよ

うになり、歌唱を自ら楽しむ姿へと変化していった。

1年5ヶ月間にわたる調査の結果、言葉の意味を理解する前の子どもは、歌詞を単語や文章として理解することから始めるのではなく、長音や強勢の箇所から認識していくことが分かった。やがてそれらの音が増えていくにしたがって、歌詞の中に「単語」としてまとまりをもつものがあることを知り、それらに意味があることに気付き、その曲への理解をより深めていく様子がみられた。

しかし興味深いことに、これらのことは歌唱時のみにみられたことで、対象児が普段の生活の中で獲得する言葉では単語や文の最後を発音する様子はなく、主に強勢が置かれる箇所から言葉を獲得していく様子であった。つまり対象児は、歌の中で歌詞を「単語」として認識していたのではなく、音声として理解していたことが分かる。

歌詞の中で表現される語順は、日常生活で用いる日本語の文法と語順が異なることが多い。有意語として言葉を発する中で「歌うこと」と「話すこと」の差異は、歌にはリズムと音程が伴われるということであり、そのため文法的な差異がいくつか存在する。例えば、今回の調査でも用いた「チューリップ」の歌詞は、「さいた　さいた　チューリップの　はなが　ならんだ　ならんだ　あかしろきいろ　どのはなみても　きれいだな」であるが、文章として単語を並び替えると「赤、白、黄色と並んだチューリップの花が咲いた。どの花見ても、綺麗だな。」となり、ひと息に（句読点以外は切れ目のない音声の連続であるように）発音される場合の文章と、単語の切れ目や息継ぎのタイミングでポーズや長音の箇所が含まれる歌では、聞こえ方に大きな差異がある。さらに、歌の中では特定の単語（さいた、ならんだ等）が繰り返し歌唱されることが多いということも、子どもにとっては認識しやすい特徴なのではないかと考える。これらのことは、対象児が歌唱を始めた箇所に一致する。

今回の調査の中で取り扱った子どもの歌の音楽的な分析は次回以降の課題としたいが、言葉の獲得初期にあたる子どもが耳にする音を考えたとき、言語による文章よりも、フレーズや音価を伴う歌の方が、今井の言う「人の声を単語に区切っていくための手がかり」を見つけやすい一面があるのかもしれない。そしてさらに、歌唱の際に保育者や養育者が視覚的な援助――例えば「ちゅうりっぷ」ならば「さいた さいた」の箇所で両手を花のように見立てた振りを付けたりする――を行うことは、ゆくゆく言葉を獲得していく上で、重要な手がかりとなろう。

7．まとめ

今回の調査によれば、言葉の獲得初期における乳児が歌唱を始める様子は、成人が歌を覚えていく過程や、幼児期以降の「歌えるようになりたい」と挑戦的に覚える楽しみや意欲とは全く別の過程を経ていくことが明らかとなった。対象児は、歌唱の中で「うた」から徐々に「ことば」へと表現を展開していったが、その過程には、①喃語や手足の動きによって、音楽を楽しむ段階　②周りからの歌いかけを観察する段階　③言葉とリズムが反復され、発音しやすい箇所を歌唱する段階　④曲の中で長音にあたる箇所（1音節で2モーラもつもの）を歌唱する段階　⑤言葉や振りを置き換えて、新しい歌として自発的に楽しもうとする段階　⑥単語と旋律の強勢箇所へと歌唱範囲を広げ、やがて1フレーズ歌うことが可能となる段階、といった複数の過程を経て、特に、初語出現から2語文出現までの間には歌唱の範囲が大きく変化するなど、音楽と言葉の発達段階が関係しあっていることが示唆された。

言葉を獲得するための学習が初語出現以前から始まっているように、人が音楽を楽しんだり面白がったりする能力もまた、言葉を獲得する前より始まっている。歌の中で新しい言葉を知り、また既知の言葉から音楽の中でのリズムや面白さを知り、表現することの喜びを得た子どもは、保育所保育指針（2017）における 3 歳以上児の保育に関するねらい及び内容に示されているように、〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。〕という姿に繋がっていくであろう。

今回は対象児の母語である日本語による子どもの歌のみを調査対象としたが、英語ではアクセントが最初にくる単語が多く、英語を母語とする赤ちゃんが頻繁に耳にする単語――例えば Mommy, Daddy, baby, girl, boy, pretty, milk, home, car―― などは、全て最初の音節にアクセントが存在する。今井（2022）によれば、これらを聴いて育つ赤ちゃんが単語をつくる音のパターンを学習する際、彼らはアクセントがきた箇所を 1 つの単語の始まりだと思い、それを手がかりとして単語を区切っていくという。今後、母語以外による歌においても検証してみたいと思う。

昨年の研究に引き続き、今回もコロナ禍の影響を受け調査対象を母子 1 組としたことをはじめ、データの数も充分ではなく残された課題も多い。この調査をひとつの契機として、今後、複数の母子を対象として継続的な調査を行い詳細に検討することでより有用な研究を進めていきたい。また、得られた研究成果を受けて、専門性の高い保育者の育成に貢献したいと考えている。

8．参考・引用文献

Jusczyk, P. W., Houston, D. M. & Newsome, M.（1999）. *The Beginnings of Word Segmentation in English-Learning Infants*. Cognitive Psychology 39, 159-207.

McDermott, J., & Hauser, M.（2006）. *Are consonant intervals music to their ears? Spontaneous acoustic preferences in a nonhuman primate*. Cognition, 94, B11-B21.

Nakata, T. and S. E. Trehub（2004）. *Infants' responsiveness to maternal speech and singing*. Infant Behavior and Development 27（4），455-464.

Oller, D. K.（1980）. *The emergence of the sounds speech in infancy*. Child Phonology. 1, Academic Press. 93-112.

今井むつみ（2022）『ことばの発達の謎を解く』筑摩書房

今井むつみ、針生悦子（2022）『言葉をおぼえるしくみ ―母語から外国語まで― 』筑摩書房

NHK 放送文化研究所編（2021）『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版

小椋たみ子、遠藤利彦、乙部貴幸（2020）『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第 3 巻―言葉・非認知的な心・学ぶ力―』一般社団法人日本赤ちゃん学協会編、中央法規出版株式会社

厚生労働省（2017）『保育所保育指針〈平成 29 年告示〉』チャイルド本社

小林美実編（2022）『こどものうた 200』チャイルド本社

小林美実編（2022）『続こどものうた 200』チャイルド本社

小西行郎、小西薫、志村洋子（2017）『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第 2 巻―運動・遊び・音楽―』一般社団法人日本赤ちゃん学協会編、中央法規出版株式会社

新村出（2018）『広辞苑』第七版、岩波書店

Singing Process of Infants in the Early Stage of Language Acquisition

Fuse, Erina*

乳幼児の言葉の獲得過程や発達段階については、先行研究により多くのことが明らかとなっているが、「人はいつからうたい始めるのか」、「人はどのように歌唱を獲得していくのか」ということについてはほとんど検証されていない。そこで本研究では、言葉の獲得初期において乳児がどのように歌を記憶し、歌い始めていくのかを明らかにする目的をもって調査することとした。

生後4か月～1歳9か月までの1年5ヶ月間に行われる歌唱過程について、全3期（第1期＝前言語期、第2期＝初語出現以降、第3期＝2語文出現以降）に分けて観察したところ、「言葉とリズムが反復される箇所と、長音（1音節で2モーラもつもの）の箇所から歌唱表現が出現する」こと、「繰り返し歌唱するうち、単語と旋律の強勢（強拍）箇所へと歌唱範囲が広がっていく」ことが明らかとなった。

対象児は、歌唱の中で「うた」から徐々に「ことば」へと表現を展開していったが、成人が歌を覚えていく過程や、幼児期以降の「歌えるようになりたい」と挑戦的に覚える楽しみや意欲とは全く別の過程を経ており、①喃語や手足の動きによって、音楽を楽しむ段階　②周りからの歌いかけを観察する段階　③言葉とリズムが反復され、発音しやすい箇所を歌唱する段階　④曲の中で長音にあたる箇所（1音節で2モーラもつもの）を歌唱する段階　⑤言葉や振りを置き換えて、新しい歌として自発的に楽しもうとする段階　⑥単語と旋律の強勢箇所へと歌唱範囲を広げ、やがて1フレーズ歌うことが可能となる段階　といった複数の過程を経て、特に、初語出現から2語文出現までの間には歌唱の範囲が大きく変化するなど、音楽と言葉の発達段階が関係しあっていることが示唆された。

キーワード：*乳児，歌あそび，手あそび，学習過程*

**Nagoya Ryujo Junior College*